



2019年4月撮影、
広島大学キャンパス内

星野一郎先生を偲んで

グローバル会計学会会長

法政大学名誉教授

菊谷 正人

広島大学大学院社会科学部研究科教授であり、本学会理事であった星野一郎先生が、令和元年9月14日に逝去された。同日に従四位瑞宝小授章を授与されている。

行年64歳（満63歳）である。あまりに若すぎる。これからの研究・教育に強い意欲を滲まされていただけに、無念であったであろうと拝察できる。本学会としても、学会設立に多大な協力を尽くされた上に、学会発展のために貢献されていた有能な研究者を失うことは誠に残念至極である。

私事ながら、筆者が初めて星野先生にお目にかかったのは、2年間（昭和61年4月～昭和63年3月）の英国留学直後に中央大学アカウンティング・フォーラム開催の発表を依頼され、懇親会の折に大学院博士課程の院生であった星野先生から声を掛けられた時である。人懐っこく、漂々然とした風貌であったが、難しい質問を投げかけてくる学問に対して挑戦的な院生であったことを記憶している。以来、研究会・学会等で再会しては、親しく付合いをさせて頂いた。平成5年5月に編者として上梓した『精説会計学』（同文館出版）には分担執筆、前任校の国土館大学在籍時には非常勤講師を引き受けて頂いた。星野先生には、編者の分担執筆、非常勤講師、学会設立等に多大な御迷惑を掛けてしまい、返礼もしないままに終わることになってしまった。

星野一郎先生は昭和31年5月18日に広島県豊田郡本郷町（現在、三原市本郷町南）で出生され、高校卒業まで広島県で過ごされた。昭和54年4月に中央大学商学部会計学科に入学され、昭和58年3月に卒業されると同時に、そのまま中央大学大学院商学研究科に進学されている。大学院では、故飯野利夫博士に師事されている。

大学院博士課程後期過程を単位取得満期退学した後、平成4年4月に信州大学経済学部講師として赴任され、助教授・教授を経て、平成12年4月に広島大学経済学部に移籍された。その間、平成7年度には東京大学大学院経済学研究科に文部省内地研究員として派遣され、平成10年3月に中央大学大学院商学研究科より博士（会計学）を取得されている。

平成10年4月24日には、博士学位論文となる『金融危機の会計的研究—米国S & L危機と時価評価—』

(同文館出版)が上梓された。その後、矢継ぎ早に『会計政策の法則—会計行動の特性と背景—』(同文館出版、平成11年)、『金融機関の時価会計—背景・役割・影響—』(東洋経済新報社、平成13年)、『金融機関の会計政策—時価会計・利害調整・情報操作—』(中央経済社、平成17年)、『財務会計ルールの論理と政策—経済社会との交錯—』(中央経済社、平成23年)、『企業会計におけるリスクマネジメント—金融機関と不正経理をめぐって—』(中央経済社、平成29年)を公刊され、一貫して金融機関の会計・会計政策に関する学術書を世に問われている。

星野先生は、金融機関会計をコア・テーマとして研究を重ねられ、金融機関会計のパイオニアとして活躍された。その内容は格調高く、かつ、重厚であり、緻密かつ謙虚な研究態度、不断に研究を重ねる御姿は敬服に値する。星野先生は、終始一貫して、学問研究には緻密かつ厳格に処せられていた。

ただし、広島大学定年退職の前には「最良の入門書」を残したいとの御希望があり、10年以上前から構想を練っていたテキストの脱稿に励まれていた。令和元年中に仕上げる予定で、夏休みにも原稿の加筆補正・推敲を重ねられていたが、広島大学の研究室で9月14日に不帰の客になられたと聞き及んでいる。

幸いにして、星野先生の遺稿は、生前に先生と親交があった補訂者(福井大学教授・岡崎英一先生、九州共立大学教授・岡部勝成先生、長崎ウエスレヤン大学教授・磯本光弘先生)の助力を得て、逝去9か月後の令和2年6月10日に『詳解 財務会計論—制度と慣習と政策のルール—』(同文館出版、全529頁)として出版された。本書は、恩師の飯野利夫先生が執筆され、スタンダードな代表的テキストとして一世を風靡した『財務会計論』(同文館出版、昭和52年)、『財務会計論〔改訂版〕』(同文館出版、昭和58年)および『財務会計論〔三訂版〕』(同文館出版、平成5年)を相当に意識して書かれている。その「はしがき」(1頁)冒頭の文章には、星野先生の研究・教育姿勢を垣間見ることができるので、下記に引用する。

「会計学(そしてその一領域である財務会計ないし企業会計も)ほど面白く、またエキサイティングな学問領域はない。

どのような学問領域あるいは分野であろうと、一定の努力や失敗をかさねた後には、それなりに面白味をみいだすことができるものである。入学試験や資格試験のためだけの勉強であれば、多くの場合、たんに苦痛を感じるだけであろうが、学術上の成果は、人類がその英知を投入して、発見または発明した膨大な成果物の蓄積であり、これを勉強することは、知識欲あるいは好奇心を満足させるうえで、これに勝るものはない。

どのような学問領域であろうとまたどのような実務領域であろうと、本質的に重要なのは問題点とその解決策をみいだすことである。内容的に重要な問題点を発見するためには、その領域についてのある程度の知識が必要または前提となる。さらにいえば、その解決についてある程度の「目途」がつかないことには、重要な問題点の発見は困難なことが多い。理論的または実務的に本質的な問題点がみいだされれば、その解決は比較的容易である。

こうした問題点を発見するためには、その領域およびそれに隣接する領域にかんする知識の修得と蓄積が必要であるとともに、それによって涵養される「センス」や「勘」も非常に大切である。この点にテキストの存在意義がある。しかしまた、このような事柄の養成に貢献するテキストを執筆することは困難であることも認識すべきである。」

星野一郎先生の御戒名は、「慈海院釋教慧」である。御戒名が示すとおり、慈悲深く教育され、会計界の発展とともに会計学に新たな智慧を与えられた。研究者・教育者として研究・教育に情熱を注ぎ込まれた星野一郎先生の慈愛に満ちた面影を偲びつつ、御冥福を心より祈る次第である。

九拜 合掌

令和2年9月14日（一周忌）